

2008・第5回  
全国菜の花学会・楽会  
in東近江市



と き 2008年8月10日(日)

ところ 滋賀県東近江市 愛東福祉センターじゅぴあ  
あいとうマーガレットステーション  
あいとうエコプラザ菜の花館

主催 第5回全国菜の花学会・楽会 in 東近江実行委員会

共催 NPO 法人菜の花プロジェクトネットワーク

後援 農林水産省・環境省・滋賀県・滋賀県教育委員会  
東近江市・東近江市教育委員会

協賛 滋賀県生活協同組合連合会・損保ジャパン環境財団・愛東菜種生産協議会  
愛東地区まちづくり協議会・コトナリエサマーフェスタ実行委員会



1973年ドイツのノンフレストに  
エネルギー供給源としての農業



## 学会●菜の花トーク

### — 食とエネルギーの地産地消を目指して —

#### ゲスト紹介

らうのマイコン

#### ○原 剛 (はら たけし) さん

早稲田大学・北京大学共同環境大学院顧問、早稲田大学環境塾・塾頭、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科前教授、毎日新聞東京本社客員編集委員、東京農業大学客員教授

1938年生まれ、早稲田大学法学部卒業

1962年 毎日新聞社入社、社会部記者・副部長、科学部長、編集委員・論説委員

1998年 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授、毎日新聞客員編集委員

主な著書 「新・地球環境読本」「日本の農業」「農から環境を考える」「環境が農を鍛える」「グローバリゼーション下の東アジアの農業と農村」

環境と持続可能な発展

#### ○中村 哲雄 (なかむら てつお) さん

中村牧場・林業経営、岩手大学獣医学科・農業生命科学科他非常勤講師  
国土交通省「地域振興アドバイザー」

1948年生まれ、日本大学農獣医学部農獣医学科卒業 (獣医師)

1971年 葛巻町役場勤務

1976年 社団法人葛巻町畜産開発公社へ派遣。23年間勤務。内11年間を専務理事として勤める

1999年 葛巻町長就任、2期8年で勇退

その間、(社)葛巻町畜産開発公社理事長、葛巻高原食品加工(株)社長、  
(株)グリーンテージくずまき社長、エコワールドくずまき風力発電(株)会長

#### ○藤井 絢子 (ふじい あやこ) さん

NPO法人菜の花プロジェクトネットワーク代表

滋賀県環境生活協同組合理事長、リサイクルせっけん協会会長

環境省中央環境審議会委員、バイオマス・ニッポン総会戦略策定アドバイザー委員  
琵琶湖から日本全国へ、菜の花プロジェクトを広めるトップランナーとして活躍中。

主な著書「菜の花エコ革命」

環境が農を變える

2003年農水省

農業政策基本法

WTO対策

自由化に不利をこうむる農業に

中国

主要品目 - 2011年

直付率

7000円/ha

農水省

十年間の補助率の推移

2003年時点

↓

2011年時点

↓

自民党

自由化の進行

民主党

補助率の維持

南窓のついで、  
菜花

## 「菜の花トーク」に寄せて

早稲田環境塾塾長 原剛

水俣病・四日市公害に始まり、半世紀に及んだジャーナリストとしての取材経験を顧みて、今日、琵琶湖に近い東近江市でこのように生き生きと楽しい、そして日本の将来を見通して、揺るぎない理念を共有する「菜の花学会」に参加できる喜びを強く感じます。

1970年代、琵琶湖の富栄養化に対する「せっけん運動」とそれに発した武村正義知事が率いる環境政党「さきがけ」の創設、さらに97年のCOP3・京都議定書を受けての「菜の花プロジェクト」の開始ほど50年に及ぶ、私の環境取材を励まし、力を与えてくれる試みは他にありません。

菜の花プロジェクトに、21世紀の日本とアジアの持続可能な社会の行方を示すこととなるであろう、「内発的発展」及び「原風景」の思想を読み取るからです。

内発的発展とは何か。菜の花プロジェクトネットワーク代表の藤井絢子さんは「国に頼らず、地域の中で食べることにエネルギーの自立をめざす活動」と言います。

地域に大きな工場を誘致し、利益を得て豊になるよりも、地域の持つ「地域力」や農業の景観を守って暮らしの豊かさを大切にする。それが外来の資本と技術に頼る「外来型発展」に対する「内発的発展」のあり方です。それは菜の花プロジェクトの思想に他なりません。

次に（日本の）「原風景」とは何か。文芸評論家奥野健男さんは、作家論の中で「自己の形成とからみあい、血肉化した深層意識である」と記しています。原風景とは人間の精神形成の空間に他ならないのです。「菜の花畑に入日うすれ、見わたす山の端かすみ淡し——」「朧月夜」を口ずさむとき、私たち日本人の胸に等しく去来する風景、それが民族の原風景といえるものでしょう。即ち菜の花プロジェクトとは、日本の原風景を蘇らせ、日本人とは何か、自己確認（アイデンティティの確立）を試みる文化運動でもあるのです。

6月の第4週 藤井絢子さんにも参加していただき、早稲田大学を会場に環境ジャーナリストの会が主催する「日中環境ジャーナリスト・NGO交流セミナー」を開催しました。研究旅行先の無農薬有機稲作栽培と生消提携農業の発祥地である山形県高島町を訪れました。町中から離れた奥羽山脈のふもとにある二井宿小学校を訪れた一行は、地場産の木材で作られた素晴らしい校舎に小さな搾油機があるのに気付きました。伊澤良治校長の話から校長自身が「高島菜の花プロジェクト」の事務局長であることを知りました。

学校給食の自給率50%を目指す二井宿小学校。生徒が「野菜を作る、収穫物を皆で食べる、価格を付けて町民に販売する。猿の食害を経験するなどの体験を通じ、自然や農業への子供たち見方が成熟してきた」と校長先生は話しています。

北京自然の友の会会長の梁さんが応えました。「このことを中国の農村に伝えたい。勉強は中央に出るためではなく、地域を伸ばすために行なうことを示したいから」

菜の花プロジェクトネットワークの撒いた種が、全国で持続可能な地域づくりの花を咲かせていることを再確認しました。

鶴見和子

景観

風景

(人の心も-51-

含めた.白の)

# 技のフロンティア



葛巻町長 中村 哲雄

夢  
の  
実  
現  
に  
向  
け  
て

過疎化、高齢化、財政難…。バブル期の箱物行政の多くが無惨な失敗に終わり、ニッポンの田舎の活力が失われているなかで、東北の奥地に、ユニークな町づくりで活況を呈している人口約8000人の町がある。

岩手県葛巻町——「東北一の酪農郷」として知られているこの地は、15基の風車、太陽光発電、バイオマス発電がフルに稼働する「日本一のクリーンエネルギーの町」というもうひとつの顔を持っている。

この町の行政の舵取りをしているのが中村町長である。その素顔は、自らを「株式会社くずまき」の社長と位置づける起業家の顔だった。

豊かな自然資源を背景に、食糧・環境・エネルギーの課題を不可分な現代のテーマと捉える行政の“技”は、自然を活かし、産業に光を放つ省エネルギー社会へのフロンティアを拓いている。白樺の林に雪が舞う4月の岩手に向かい、クリーンエネルギーの町に吹く風を追った。

(文：松崎 辰彦)

省エネルギー

# “クリーンエネルギーの町”に吹く風

## クリーンエネルギーのショールーム

「酪農の町なのに牛がいないな……」

初めて葛巻町に足を踏み入れたとき、意外の感をもった。牛などどこを回っても見あたらない。案内してくれた土地の人によると、冬は牛は屋内に入れるから、外からは見えないという。

「この辺りは寒い年は4月でも雪が降りますよ」

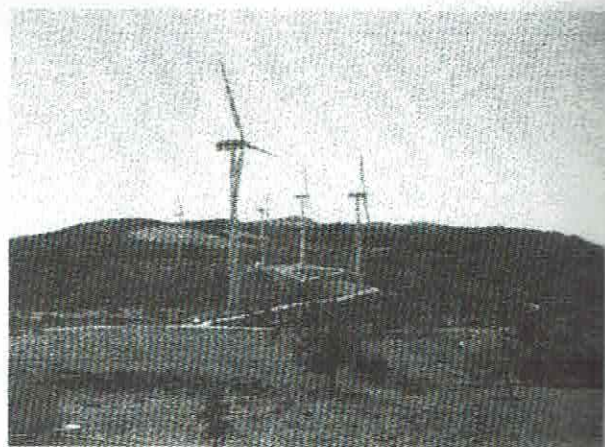
このことばに、それまで東北に足を踏み入れたことのなかった私は、ある感慨をもった。これが「北緯40度の町」なのか――

その後、ライターとして葛巻町のクリーンエネルギーの取材を重ねるうちに、この町の空気が少しずつ肌に染みこんでいった。「石橋を叩いて渡らない」といわれるほど慎重な気質は、雪や寒さとの闘いから彼らが身につけたものなのだ。

岩手県葛巻町は、環境問題に深い関心を持つ人々の間で、風力・太陽光発電、バイオマスを最大限に活用したクリーンエネルギーの先進地域として広く認知されている。全国有数の酪農地帯であり、食糧自給率がカロリーベースで200%を超えている。この町は1997年の京都議定書以降の環境意識の高まりに敏感に呼応し、地球規模の環境・エネルギー問題に果敢に取り組んできた。

横浜市と同等の面積の中に風車や太陽光発電などのエネルギーシステムが点在し、一日クルマを走らせれば、現在世界で稼働している再生可能エネルギー(この町では「クリーンエネルギー」という呼称で人々に親しまれている)のほぼ全体像をつかむことができる。葛巻町はまさに「クリーンエネルギーのショールーム」なのである。

葛巻町のクリーンエネルギー開発のプロセスは、“ないものねだり”ではなく、風や太陽、畜糞などの資源に価値を置く“あるもの探し”だった。多くの自治体が木に竹を接ぐような箱物行政に振りまわされ、バブル崩壊後は無惨な結果を残している一方で、かつて「岩手の辺境」と呼ばれた葛



上外川高原牧場に立つ12基の風車

巻町は足下を見つめ、「環境の時代」の風に乗り、いち早く未来社会の入り口に立ったのである。

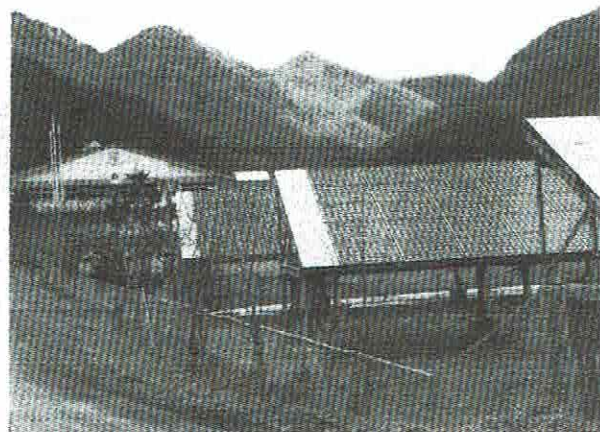
## 食糧・環境・エネルギーの課題に挑む

葛巻町行政の中心にいるのが中村町長である。1948年生まれ、まさしく団塊の世代の一人だ。そろそろ還暦を迎えるが、その若々しさは際だっている。落ち着いた物腰だがフットワークは軽い。外部からの視察があれば、ときに長靴を履いて自ら案内役を買って出る。質問に対しては驚くほど緻密な数字を挙げて、明快な説明を返す。

日大農獣医学部時代には学生運動に遭遇したが、運動には加わらず大学正常化を進め、卒業後は家庭の事情もあって葛巻町役場に就職する。その後、23年間にわたる葛巻町畜産開発公社勤務を経て、1999年の町長選に勝利し、町長に就任した。

大学時代に柔道部キャプテンを務めたというだけあって、その辣腕ぶりには天性のリーダーシップが感じられるが、“株式会社くずまき”の社長を自任する中村町長の卓越した経営感覚は、言語を絶する苦闘の果てに身につけたものだった。

この辺りの経緯は亀地宏『株式会社「岩手県葛巻町」の挑戦』(秀作社出版)、三橋規宏『サステナビリティ経営』(講談社)などに詳しいが、特筆す



葛巻中学校の一角に設置された太陽光発電システム。この中学校が必要とする電力の25%を生み出している。

べきは、小岩井農場から牧場経営の指導に来ていた畠山章一氏に、若い頃から徹底して鍛えられたことである。

「畜産開発公社時代に、私は6年間で役人の血を抜かれ、民間の感覚をたたき込まれました」

乾草を雨から守る一枚のシートを買うにも品質と価格を追及され、答えられないと雷が落ちた。「私が30歳そこそこの時分でした。“自分が知らないということを知れ、知ったかぶりをするな”ということだったんですね」

ノイローゼになる一歩手前まで追いつめられたという中村青年であったが、この時期に血肉に刻み込まれた組織経営の厳しさ、税金を扱う責任の重さ、そして常によりよい仕事を追求するチャレンジ精神は、現在、葛巻町長として活躍する彼のゆるぎないバックボーンとなっている。

1999年に町長に就任した翌々年、全国でも珍しい「環境エネルギー政策課」を役場に設け、クリーンエネルギー推進の旗幟を鮮明にした。その背景には彼自身のグローバルな未来観があった。

「毎年、地球上から北海道と東北6県を合わせたくらいの面積の農用地と森林が失われている。その一方で、65億人の人口はやがて100億人に…。」

21世紀の課題は“食糧・環境・エネルギー”であることは間違いない。私の町づくりのコンセプトも、地球規模の問題の解決に貢献しながら発展的状况を構築することです」

## 「ヨーロッパ並み」とはいかなくても

葛巻町には一基400kwの風車が3基と一基1750kwの風車が12基、総計15基の風車がある。出力合計22200kw、発電量は5600万kwhに及び、一般家庭16600世帯分の電力に値する。

葛巻町の全世帯数がおよそ3000世帯で、町全体の電力使用量が2002年でおよそ3000万kwhなので、町全体の消費分の185%をつくりだしていることになる。

このほか月島機械との共同による木質バイオマスガス化発電実証設備、葛巻町畜産開発公社が主体となった畜糞バイオガスシステムもあり、幅広い実用化をめざしている。さらに中学校や老人ホームにも太陽光発電が取り入れられている。

最近では、葛巻町は100%補助による研究開発で牛の排泄物から水素を製造する実験に世界で初めて成功したという。かつての辺境の地は、いまや人類史に大きな光を発しているのである。

葛巻町のクリーンエネルギーの活況ぶりを描いた本に前田典秀『風をつかんだ町』（風雲舎）があるが、ホテルのロビーやお土産屋さん、そば屋さんに至るまで、この本が平積みになされているのを見ると、町の人々が「クリーンエネルギーの町」を守り育てようとする強い意欲が伝わってくる。

こうした町の人々の変化を見守る町長は言う。

「ヨーロッパでは国民的合意があり、酪農家が副業でクリーンエネルギー事業を始める例もあります。日本もヨーロッパ並みとは言いませんが、国家がリーダーシップをとってクリーンエネルギーを推進してほしいですね」

ちなみに日本の「新エネルギー等電気利用法」（RPS法）は新エネルギーの普及をめざして制定されたものだが、新エネ導入の目標値が小さいことから、むしろ新エネ普及の足かせになってしまおうという見方も多い。

ヨーロッパの例をあげれば、デンマークでは風力発電を基盤としたエネルギー政策を推進した結果、オイルショックの頃にわずか2%だったエネ

省エネルギー

ルギー自給率が30年の間に140%まで向上している。現在、風力発電量の総電力に占める割合は20%に達している。こうしたヨーロッパの先進例を足がかりに、町長は国内でのクリーンエネルギー全量買取制度の必要性をも訴える。

クリーンエネルギーを推進するためには、行政のリーダーシップと国民的合意が不可欠である。そのような認識をもって、葛巻町の職員は頻繁に町民のもとに出向いて、「出前講座」を開いている。子どもから高齢者まで、この町の人たちは温暖化問題などをテーマとする講座を通して、クリーンエネルギーの重要性を学んでいるのである。

### 文化としての省エネルギーを未来に

クリーンエネルギーによる町づくりは、自ずと人々の省エネ意識を高めることにつながっている。葛巻町は2004年に「省エネルギービジョン」を策定し、町内のエネルギー消費量を2002年比で2010年までに6.6%削減することを目標に置いた。

そんななか、伝統校である葛巻小学校は長年の環境教育の実績をもとに、平成13年から15年まで、省エネルギーセンターから「省エネルギー教育推進モデル校」に指定されている。

これが大きな励みとなって、子どもたちは地域にある風車や太陽光発電の役割を調べたり、家でも家族ぐるみで省エネナビやエコワットを活用したり、楽しみながら省エネに励んだ。

6年生の児童は、温暖化で南極の環境が激変したことを知り、葛巻にも温暖化の影響が出ていることを学んだ。「なんのために、自分たちが省エネに取り組まなければならないのか」を深く考えた彼らは、自分が省エネを実践するだけではなく、全校に活動を呼びかけるようになったという。

「わが家の節電大作戦」というカードを見せてもらった私は、「電気使用量を1日何Kwh以内にするぞ!」という数値目標もさることながら、「同じ部屋で家族団らんする」「お風呂は家族が続けて入る」といった子どもたちの発想に大切なことを学んだ。省エネルギーは暮らし方を見つめなおすこ

とから始まる——この町では、それを子から親へ、親から子へと伝える文化が根づいていた!

常に子どもたちと向きあってきた中村町長も、「子どもたちは環境とエネルギーの大切さを知り、家庭や学校での省エネ活動に始まり、いまや酪農でも子どもたちのグループができています。省エネルギーというのは、生きるための思想であり、文化なのです」と熱っぽく語る。

### 「エネルギーの地産地消」をめざして

現在、エネルギー自給率約80%の葛巻町には風車増設の構想がある。制度上の課題はあるものの、町長はさらに80基を建て、「クリーンエネルギーの町」をアピールしたいと未来への夢を描く。

「葛巻町は日本一のクリーンエネルギーの町です。“エネルギーの地産地消”をめざして、エネルギー自給率を100%以上にする取り組みも始めています。そのためには、“株式会社くずまき”という起業家精神をもって、ひとつの町を経営するような戦略が求められているのです」

ミスター・クリーンエネルギーと呼ばれ、人望の厚い環境エネルギー室長の近藤勝義さんも、「環境・エネルギーはどこでも難しい課題ですが、私たちの取り組みが葛巻町民の方々に大きな影響を与えているため、やりがいがあります」と言う。

近藤室長のもとで働く若手の吉澤晴之さんは、「難しくかまえずに、気がついた人が気がついたことをやればいいのではと思います。私自身は、町民の方々に感謝され、お礼を言われたりすることが何よりうれしいですね」と述べる。

東北の美しい自然に抱かれながら、飽くまで前進を強調する町長と葛巻町職員。いま、「北緯40度の町」の未来に、人々が関心を寄せている。

.....  
中村 哲雄 Nakamura, Tetsuo  
1948年岩手県葛巻町生まれ。1971年日本大学農獣医学部卒業、同年葛巻町役場に就職。担当は畜産。その後、葛巻町畜産開発公社に外向。1999年4月より町役場商工観光推進監。同年6月に役場を退職。1999年8月葛巻町町長就任。2003年再選。クリーンエネルギーを活用した町づくりで全国から注目を集める。  
.....

21世紀の課題は「食糧・環境・エネルギー」であることは間違いない。私の町づくりのコンセプトも、地球規模の問題の解決に貢献しながら発展的状況を構築することです。



## 岩手県・葛巻町 前・町長 中村哲雄さん

平成19年8月、葛巻町役場職員畜産担当5年、第三セクター派遣23年、町長2期8年の任期を終えて退任した前町長中村哲雄さんは、現在牧場を経営しています。町長をやめた現在も葛巻町の応援団として講演会等に全国的に活躍していますが、その中村哲雄さんにインタビューしました。

### ○町の概要

葛巻町は、人口約8,000人、北緯40度の岩手県北に位置し、“ミルクとワインとクリーンエネルギーのまち”をキャッチフレーズにまちづくりを展開し、バイオマスでも畜産バイオガス発電や木質ガス化発電などを導入するなど、環境・エネルギー等では我が国を代表する町のひとつです。

主な産業は、畜産と林業であり、『くずまき高原牧場』は第三セクターの成功事例としても知られています。後述の葛巻林業㈱のペレット工場があるのもこの町です。

平成15年度自治体環境大賞、16年度環境大臣表彰、17年度新エネルギー大賞、18年度バイオマス利活用農林水産大臣賞等を受賞。平成20年には畜産開発公社が評価され日本農業大賞を受賞する等、小規模ながら全国から注目される先進地域です。

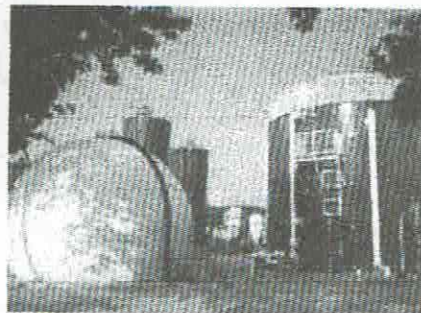


町長時代の中村さん

### ○『食糧・環境・エネルギー』のコンセプトはどう発想したか

あと4ヶ月で21世紀となる時期に町長に就任しました。21世紀に対応した町づくりとは何か？と模索した結果「町が持っている多面的資源と機能と人材を活かし、21世紀の地球規模での課題である食糧・環境・エネルギーの問題解決に貢献しながら町の発展的状況を構築しよう」と考えました。それは、葛巻町の現状をどうするかを考え抜いた先に辿り着いたものです。地域の振興と地球温暖化防止という、地域課題とグローバルな視点をマッチングさせることになったのです。

現在の人類最大の仕事は地球温暖化防止であると考えていますが、人類が総力を挙げて全てを動員しても地球環境の改善は難しい状況まできているのです。人類の安全で安心な日常生活が脅かされています。また、動植物の生存も危機に瀕しており、地球の生態系は崩れています。地球に存在する全ての未利用資源をエネルギーに転換して環境・エネルギーの問題に貢献すべき時期に来ています。日本は、食糧・環境・エネルギー問題の重要性をしっかりと認識し、国民的合意形成を図り、国の強力な指導のもとクリーンエネルギーの種類別に単価を設定し全量買取制度にすべきと言うのが私の持論です。これに貢献することが、町の活性化に繋がると考えています。



バイオガスプラント

このために、地球規模の対策を地域から進める必要があると考えました。町が持っている様々な資源、機能、人材を活かせれば、“地域の資源を宝に変えて”幸せをもたらすことが可能となるのです。皆さんからよく時代のトレンドを捉えた展開ではないか、と言われるかもしれませんが、もともと、そのような事を狙ったものではありません。町の現状と将来を考え、どの様に町を良くするのか、もがき苦しみ、その中から発想したものなのです。

### ○思いをビジョンに、そして組織を整備する

先述の町長としての『思い』を実現するために、何をもって、地域住民の一体感を生み出し、一枚岩にして町政を進めるのか、まず考え方を示し、次に組織作り着手しました。

平成13年、町経営の基本方針を明確にするため、食糧生産と林業を通じた環境の問題は農林課（既設）の対応とし、一方、ごみや環境衛生問題を含めて環境、エネルギー問題対応として「環境エネルギー対策課」を新設し、積極的に取り組んでいくこととしました。平成18年度にはこれを統合して「環境エネルギー課」に改称しています。

平成 11 年 3 月に新エネルギービジョンが策定され、それに基づき、クリーンエネルギーの具体化を図りました。その中で、バイオマス事業にも取組み実践してきたものが、先ほどの、畜産バイオガス発電や木質ガス化発電などです。私の退任後、バイオマスタウン構想の公表を国に申請しています（※平成 20 年 3 月に公表見込み）。家畜排せつ物と木質バイオマスを複合化させたメタンストックシステムの導入に向け、酪農家と大学研究者や NPO 等でその可能性を探っているのです。

### ○地域経営の視点を忘れず政策の優先順位を实践

行政だからと言っても、今の時代はコスト感覚を持たない事業は許されません。常に地域経営の視点からの取組を継続して展開して来ました。やれるものは何でもやり、バイオマスにのみ力点をおくのではなく、まず、一次産業を根付かせ、そこから二次産業を生み出し、さらに三次産業に結びつけている。地域で生産される物は、外部の市場に出すだけではなく、地域独自の商品開発を進め、地域に客を呼び込むことを目指してきました。その際には、常に外部にもネットワークを張り巡らし、師と仰ぐ人材を見つけ学ぶことでノウハウを蓄積してきたのです。



森の館ウッディ  
(床暖房にペレット燃料を利用)

### ○地域資源を活用した成果とは

“ないものねだり”ではなく、“あるもの探し”を徹底して行ってきました。全国に先駆けて、やれるものは何でも取り組んできたのです。その結果はどうかと言えば、昔は林業しかなかった町に地域資源と人材を生かした第三セクターが生まれ、『くずまき高原牧場』牛 3,300 頭、14 事業、従業員 120 名、売上高約 12 億円、ここでは、牧場体験学習やグリーンツーリズムも受け入れ、後継者対応の研修センターなどを運営し、黒字経営で日本一の公共牧場になりました。



ペレットボイラー  
(介護老人保健施設内)

また『くずまきワイン』は、ワインの醸造、販売、レストラン経営を行い、従業員 29 名、売上高 3.8 億円、『グリーンテージくずまき』では、ホテル経営を行い各種パーティーの企画等、従業員 21 名、売上高約 1.8 億円。第三セクター 3 社で売上高約 17.7 億円、毎年約 5 千万円の黒字、従業員 170 名、内 70 名が都会からの帰郷者であり、活力あふれる町のイメージアップと経済活性化に貢献しています。

『株式会社くずまき』の発想で、企業感覚による町の経営を目指しているのです。国からの交付税交付金が 8 年間で約 50 億円減額になっている状況の中で、借金約 20 億円を削減しながら再構築し、牧場のスリム化や外部委託などにより財源確保を図り、毎年約 1.8 億円の黒字経営を実現しているのです。その結果、行政関係者の視察やメディア等、多くの人が訪れるようになりました。町長就任時には年間 10 万人に満たなかった入込客は約 5 年後には 50 万人を突破するまでに至りました。その結果、町民も外部の人にも刺激され、地域のよさを知り、町に住んでみて良かったと、誇りを持てるようになりました。様々なメディアに度々取り上げられたことが町民を勇気付けたのです。

### ○“くずまき高原牧場エコファーム構想”を全町バイオマスタウンへ

くずまき高原牧場は、牛を年間平均 3,000 頭飼養し、牛乳工場、チーズ工場、パン工場、宿泊施設、レストランを有し、年間 30 万人が訪れます。ここでは、利用する全てのエネルギーを、風力発電、太陽光発電、畜産バイオマス発電、木質バイオマス発電で自給することで、環境負荷の軽減や、地域循環型の牧場とすることを目指しています。このため地場産材利用、老人、知的障害者など弱者を育む施設も備え、牛飼いを主業としながら、地球環境、地域、牛、人間との共生を目指した牧場の再構築を進めています。



くずまき高原牧場

この考えを町に広げれば、全町バイオマスタウンになるのです。それが現状において描いている夢であり、将来像なのです。必ずや実現するものと考えています。

△市「共進町」

人口 5000人

2900世帯

面積 434.99 km<sup>2</sup>.

基幹産業等、

酪農・林業、

13500頭、

170人雇用 4億5000万

資金、

ドイツ

ほろほろコンクール

点から画へ 展覧中

農家の愛ほろコンクール 各屋根に太陽光発電  
はるかなる



「東近江菜の花エコプロジェクト」  
マスコットキャラクター「あいな」

専ら、食糧自給率  
に。

複合作物  
食料  
エネルギー  
を飼料

第5回全国菜の花学会・楽会実行委員会

事務局：あいとうエコプラザ菜の花館・NPO法人愛のまちエコ倶楽部

〒527-0162 滋賀県東近江市妹町70番地

TEL 0749-46-8100 FAX 0749-46-8288

E-mail: nanohana@city.higashiomi.shiga.jp

URL: http://www.city.higashiomi.shiga.jp/nanohanakan/

全国2ヶ所 現在1800の自治体